

『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関係図』

— 吉備の女系女子の王家とヤマトの男系男子の王家(天皇家)との交錯の図示 —
旧吉備王国(郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口県など山陽地方)系巫女神道・巫女歌道
令和新时代 最終協力版

平成9年 巫女、社家子女、歌道家子女らが歌書や神儒仏の秘伝奥義の岩崎への相伝を開始し、岩崎が継承と調査研究を開始
平成23年7月6日 岩崎が本資料を起筆
令和元年6月2日

著作権法および『岩崎純一全集』第6巻に基づき、協力者の著作部分に係る著作権の全部の岩崎への譲渡が完了したことをもって、本資料を公表するため、最も早期からの作成資料『旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧』の名称を『日本旧派歌道流派総覧』に変更し、これを母体として、本資料を含むその他の資料と合わせた『岡山県巫女特別協力資料』を設置
令和元年8月14日 公開、令和2年5月18日 最終更新

筆頭編著者：岩崎 純一

(岩崎純一学術研究所所長、財団事務局長、大学非常勤講師等)

編纂総本部：岩崎純一学術研究所(IJAI)

編纂作業：同上第二学堂(『岩崎純一全集』編纂学堂)第一学廊第三学館第二学庭

編纂作業補助：同上第二女子学堂(『岩崎純一全集』編纂女子学堂)第一女子学廊第一女子学館第〇女子学庭～第九女子学庭

本資料群の編著者・協力者一覧

岩崎純一学術研究所(IJAI)
岡山県巫女特別協力資料

(1)『日本神道道統図』(『全集』第14巻 別添資料)

(2)『吉備・ヤマト相関図』(『全集』第14巻 別添資料)

(3)『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関係図』(『全集』第32巻 別添資料)

(4)『日本旧派歌道流派総覧』(『全集』第92巻 別添資料)

(5)『日本旧派歌道流派系統図』(『全集』第92巻 別添資料)

(6)『吉備巫女神道に対する弾圧策の実相とその再興計画』(『全集』第14巻 別添資料)

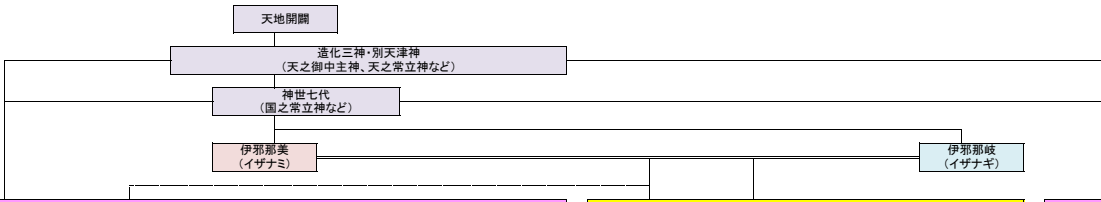
(7)『巫女神道吉備派道統総覧』(『全集』第14巻 別添資料)

(8)『巫女神道吉備派の大局的歴史観マップ』(『全集』第14巻 別添資料)

姉妹資料	『巫女神道比較表』(『全集』第14巻)
	『巫女神道探訪記 - 日本のアニミズム感覚の源流を訪ねて -』(『全集』第14巻)
	『大日本帝国陸軍歩兵第十連隊(岡山・鉄五四四八部隊)戦史調査資料』(『全集』第34巻)
岩崎純一学術研究所ウェブサイト (本資料群の掲載場所)	https://iwasakijunichi.net/
※ なお、本資料群は、上掲の巫女や歌道子女らが所属する社家や神社、岩崎が協力している女子寮の閲覧室の一部でも入手できる。また、岩崎が非常勤講師や特別講師を務める大学の講義でも、適宜使用する。	
参考文献(岡山県巫女特別協力資料の全資料の参考文献)	
Copyright (C) 2012-2019 岩崎純一 All Rights Reserved.	

吉備巫女神道・ヤマト皇統系図

本資料は、岩崎純一学術研究所(LJAI)の女性スタッフの多く(巫女)の出自である古代吉備王国系の巫女神道と、ヤマト王権(大和朝廷、すなわち現日本国の源流)との、血統の交わりを系図で示したものである。前者は女系女子による継承、後者は男系男子(奈良時代と江戸時代には一部男系女子)による継承(皇統)を、各々の存立の根本としている。『記紀』などの日本神話と巫女らが継承する吉備神話の双方を折衷し、作図している。吉備の女系巫女家系は、三度に渡って皇統に入り込んでおり、蘇我氏血統の推古天皇以外の奈良時代の全ての女帝(女性天皇)に女系でつながる。従って、現在のこれら巫女は、およそ70~80代を経た女帝の遠戚である。このことは、吉備の巫女たちが、崇仏派の蘇我氏に対抗した廣仏派の物部・忌部・中臣神道と手を結んでいたことと、直接的な関係がある。(神道系図、吉備・ヤマト系図も併せ見よ。)



祭神系統→ :大和朝廷による『記紀』編纂後、これらに登場する神々について朝廷(のちの日本)とそれ以外の王権がもった態度のこと。(詳しくは神道系図を見よ。)

天の御中主神・国常立尊信仰位 (現宮中三殿の神職が祀る天神地祇から天皇守衛にまつる八神すなわち旧八神職が祀った八神を除いた神々と、宮中三殿が祀らない非ヤマト系・日本土着の八百万の神々への信仰が優位)

天照大神(新巨賢所)・天孫・皇靈(現皇靈殿)・八神(旧八神職)信仰(天皇親拝、個人神親拝)優位

天の御中主神・国常立尊信仰位

古代三大遺丘墓・古墳文明圏→ (墳丘長さ200m以上の王国) (詳しくは吉備・ヤマト系図を見よ。)

古代吉備古墳文明圏

古代吉備古墳文明圏

古代ヤマト古墳文明圏

古代毛野古墳文明圏

古代四大王国→ (版圖の上位四位) (詳しくは吉備・ヤマト系図を見よ。)

古代筑紫王国文明圏

古代出雲王国文明圏

古代吉備王国文明圏

古代ヤマト王国(大和朝廷)文明圏

古代毛野古墳文明圏

ヤマトが、ヤマトの侵攻・支配に抵抗する磐井の乱(527~528)などの筑紫の乱を鎮圧して以来、太宰府を設置。奇しくも太宰府は、ヤマトに取り込まれた吉備家系(吉備氏の吉備真備などが中心となって整備。古代筑紫は、早期にヤマトの王権支配に吸収された。ヤマト・筑紫連合軍は、九州中南部の先住勢力(熊襲、隼人)への征討を何度も行っている。また、征討を結んだ吉備や新羅の援軍のもと、抵抗をかけた。吉備の造山古墳からは出土と考えられる石棺には、阿蘇凝灰岩が使われている。また、その障塚の石室は、九州中南部に特有の構造で、これにも九州・四国産の石が使われている。さらに、障塚から出土した馬形帯剣は、百濟ではなく加耶が新羅のもとと推定される。吉備は明らか、九州北部の筑紫勢力やヤマト、百濟との衝突を可能な限り避けながら、同盟した熊襲や隼人を通じて、加耶・新羅と同盟・交際している。これらのことから、古代筑紫の親ヤマトとしての立ち位置は明白であり、ヤマト・筑紫・百濟連合と吉備・熊襲・隼人・加耶・新羅連合との対立の構図があったことが分かる。

ヤマトが、ヤマトの侵攻・支配に抵抗する磐井の乱(527~528)などの筑紫の乱を鎮圧して以来、太宰府を設置。奇しくも太宰府は、ヤマトに取り込まれた吉備家系(吉備氏の吉備真備などが中心となって整備。古代筑紫は、早期にヤマトの王権支配に吸収された。ヤマト・筑紫連合軍は、九州中南部の先住勢力(熊襲、隼人)への征討を何度も行っている。また、征討を結んだ吉備や新羅の援軍のもと、抵抗をかけた。吉備の造山古墳からは出土と考えられる石棺には、阿蘇凝灰岩が使われている。また、その障塚の石室は、九州中南部に特有の構造で、これにも九州・四国産の石が使われている。さらに、障塚から出土した馬形帯剣は、百濟ではなく加耶が新羅のもとと推定される。吉備は明らか、九州北部の筑紫勢力やヤマト、百濟との衝突を可能な限り避けながら、同盟した熊襲や隼人を通じて、加耶・新羅と同盟・交際している。これらのことから、古代筑紫の親ヤマトとしての立ち位置は明白であり、ヤマト・筑紫・百濟連合と吉備・熊襲・隼人・加耶・新羅連合との対立の構図があったことが分かる。

女神たちに乱暴をはたらき糞尿を撒き散らしたスサノオをアマテラスが追放して以来(そうだと主張、記述した『記紀』を朝廷側が編纂して以来)、出雲族は伊弉大社(出雲大社)を建設し、概ねヤマトに反抗的となった。次第に、大社の男系社家はヤマト側になることが多くなったが、出雲の巫女たちは、しばしば反ヤマト・反皇統を標榜して、その出雲支配に抵抗した。しかし、近代には、国家神道の整備をめぐり祭神論争が起き、伊勢神宮、国家神道、皇室神道、神社神道(伊勢派)と出雲大社(出雲派)が激しく論議。出雲の巫女たちも出雲派に立ち、出雲らしい社家・巫女の共闘が再来した。だが、天の御中主神・国常立尊とスサノオ・大国主をアマテラスと同格と見なし、天の御中主神・国常立尊とスサノオ・大国主の排斥によって保証された国家神道が形成され、出雲大社教や岡山神習教、黒住教、金光教などは教派神道として別に整備された。2014年、権宮司・千家国憲と典子女王の婚姻によって、旧出雲と皇親・旧伊勢派の姻戚関係が成った。この時、出雲と吉備の多くの巫女巫女たちは傍観し、最終的には傍観したが、一部の原理主義的な巫女たちは、スサノオ・大国主を自らに降ろして形式的にのみ抵抗する秘伝の神懸り神事を執行を行った。

ヤマト勢力が、吉備で発祥した「特殊器台・特殊壺」を畿内へ持ち帰り、大王に報告・献上。大王・ヤマトは、これを「埴輪」として古墳に並べ、以後、持ち帰った吉備の技術で大量生産。これ以降、吉備の埴丘墓・古墳・製鉄などの技術は完全にヤマトに目を付けられ、吉備はヤマトにとって最大の征服対象となる。ヤマトの大王(天皇)・皇親・豪族らは、吉備の女(巫女)たちの嫁娶を開始し、妃・妻とする(応神・仁徳・雄略天皇は、既婚の吉備の女を強奪)。これらの天皇が実は吉備人で、穏健な王位継承者であったとする異説は、『神道系図』や『吉備・ヤマト系図』を見よ。次に、当時全国最大の造山古墳など、吉備の前方後円墳の技術を模倣して、菅田朝廟山古墳(伝天照天皇陵)、大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)などの巨大前方後円墳を造営。上石津ミサンザイ古墳(伝履中天皇陵)も同様と考えられる。造山古墳は全国最大から第四位に転落。これら百舌鳥・古市古墳群と吉備の古墳の関係についての詳細は、吉備・ヤマト系図を見よ。吉備の女を妃・妻とする古代天皇(第50代桓武天皇まで)、皇親(日本武尊など)、豪族(崇仏系・蘇我氏など)は60%以上は吉備系と推定される。ヤマトは、ヤマトの侵攻・支配に抵抗する吉備氏の乱(吉備下道臣津原の乱、吉備上道臣田原の乱、463)などの吉備の反乱を鎮圧し、吉備大宰府を設置。古代吉備王国は滅亡。吉備津彦は、ヤマトに送り込んだ将軍であるとする説から、ヤマトに抵抗した吉備の英雄とする説まで、諸説あり(主に「改道説」で解説)。吉備の男系豪族(吉備氏、和氣氏など)はヤマトに取り込まれ、その中核を成す(吉備真備、和氣清麻呂など)。歴代天皇は吉備の残留豪族・職能集団に大量の鉄器・埴輪・瓦やそれらの技術を献上させ、聖武天皇が吉備の互で東大寺を建立。備前・備中・備後など吉備各国における朝廷主導の園分寺の建立や一宮の整備により、王国・王朝としての吉備は完全消滅。当初から華頂巫女を中心とする女系継承であった古代吉備(岡山県・山陽地方)の「ヤマト系」の巫女神道は、ヤマトに多くの巫女たちを奪われ、吉備王国を滅ぼされて以来、独特な歴史を歩んできた。朝廷の一員となった吉備氏らとは逆に、反朝廷・反皇統の立場をより鮮明にし、天の御中主神・国常立尊信仰を中心に女系巫女神道を守った。明治政府が巫女禁断令を発して巫女を弾圧した際には、多くの家系が廃絶させられたが、生き残った家系は祭祀を自主的に秘伝秘伝化させて維持している。現存も、国家・宮内庁・神道勢力の目に触れぬよう執行している。岡山県は古来(法然や栄西はもちろん)全国随一の新宗教発祥地であり、神習教、黒住教、金光教、ほんぶしん、神道天行居など(教派神道系・新宗教系)が皇室神道、国家神道の天照・天皇崇拝と相容れず、利害が一致した巫女たちを取り込んで生業を与えた。しかし、第に巫女たちは教団から離れ、本来の吉備の巫女神道の秘伝を行っている。

『古事記』や、『日本書紀』をはじめとする六国史、『新撰姓氏録』など、ヤマト王権(より王朝としての確立を強調する場合、「大和朝廷」と称する)が編纂した古代文獻は、その全てが天照大神・天孫信仰中心主義によって成り立っている。一応、世界のどの親和の例にも漏れず、宇宙創生・天地開闢の段を記述せざるを得ないため、『記紀』は造化三神・別天神および神代七代を登場させており、その上で、その子孫の正統は天照大神であり、ニギハヤヒ(ニギハヤヒ)と高い天孫族であり、その直系子孫である神武天皇の血統である旨の記述を展開している。本来、天地開闢の記述は、天照大神・皇統・ヤマト王権の正統性を列島中に誇示するためであったと受け、出雲と吉備に対しては、極めて高い意義を持って、ことさらにヤマトの優位性を強調している。ところが当然、『記紀』のこのような構造は、天照血統・皇統でない血統の台頭を許すことになる。これはヤマト王権の誤算であった。但し、そのような血統は、『新撰姓氏録』に記載があるか否かで、全く別の運命を辿る。それは、『新撰姓氏録』に記載されている氏族がすなわち男系氏族であることに起因する。『新撰姓氏録』は、当時の氏族を「皇別」、「神別」、「諸君」に分類し、その出自を示す(吉備・ヤマトの系図を見よ)。そのうち、例えば藤原氏は、神別天孫系氏族であり、(皇別系家の時代を除き)天皇と女系でかつつながらないにもかかわらず、むしろ、代々の娘を妃として送り込み、女系姻戚関係を巧みに利用することで、あらゆる皇別氏族の権勢を凌駕するに至った。一方、当初から華頂巫女を中心とする女系継承であった古代シャーマニズムの巫女神道家は、太古には全国に存在したと考えられるが、『新撰姓氏録』には記録されず、現在は秘伝秘伝し、旧古代吉備王国(岡山県・山陽地方)に集中して残っている。このことは、ヤマトが吉備を滅ぼし、巫女たちを妃・妻として以来、残る吉備の巫女神道が天の御中主神・国常立尊信仰、時に反皇統を標榜して女系巫女神道を守ってきたこと、明治政府が巫女禁断令を発して巫女を弾圧した際に巫女たちが自主的に秘伝化したこと、岡山県が古来(法然や栄西はもちろん)全国随一の新宗教発祥地であり、神習教、黒住教、金光教、ほんぶしん、神道天行居など(教派神道系・新宗教系)が皇室神道、国家神道の天照・天皇崇拝と相容れず、巫女たちを取り込んで生業を与えたこと、全てによる。また、藤原氏で、神道祭祀氏族の中臣氏の出自であり、中臣神道と後継の大和臣神道の秘法神事も、やはり吉備を中心に残っている。

埴丘規模は、ヤマト、吉備に次ぐ全国第三位である。また、吉備と同様、ヤマトの巨大古墳よりも早期の古墳文明であり(古墳時代当初は、吉備に次ぐ第二位)、ヤマトは、吉備のみならず毛野の古墳技術も、菅田朝廟山古墳(伝応神天皇陵)、大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)、上石津ミサンザイ古墳(伝履中天皇陵)などに取り込んだ可能性がある。毛野は、概ね天の御中主神・国常立尊信仰位位の文明であったが、出雲・吉備に比べて、当時東方の辺境であり、毛野の王族が大王(天皇)や『記紀』・日本神話の存在を知ったのも極めて遅く、反ヤマト感情の確立も成らぬまま消滅した。その後、毛野以北や周辺の熊襲・アイヌなどの諸民族も、征夷大將軍・征夷大將軍によって征討された。のち、征夷大將軍は単に「武家の棟梁」の意に転化する。

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

願来→ (詳しくは吉備・ヤマト系図、神道系図を見よ。)

主な神道教派→ :近代以降の巫女の信仰教団は、明治政府による巫女禁断令以降の論議

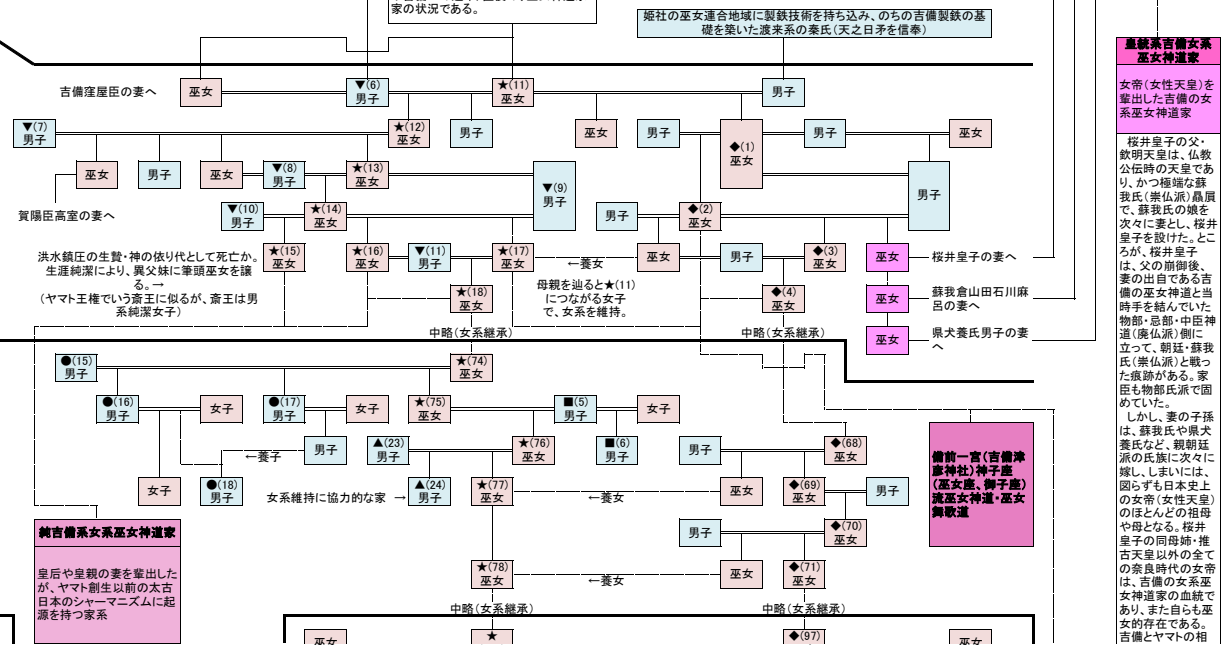
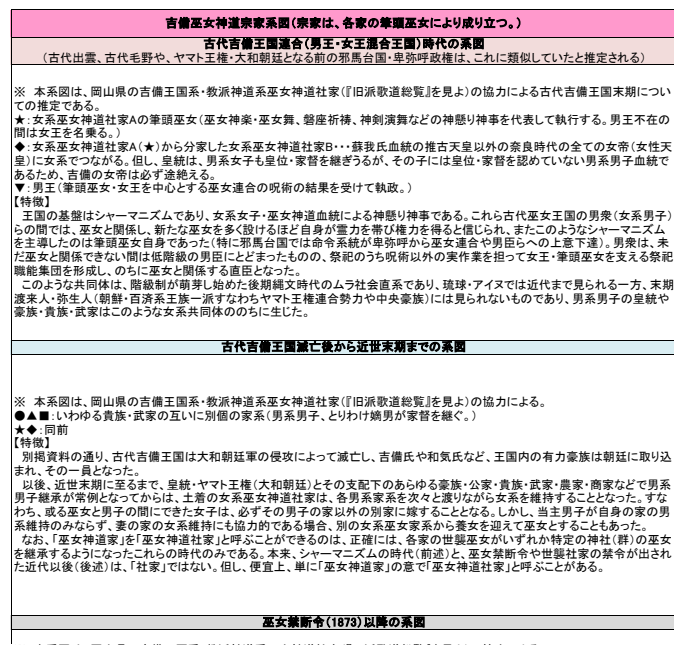
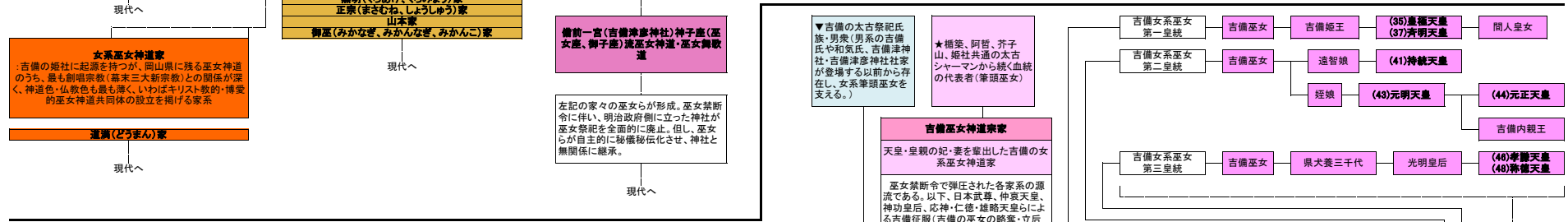
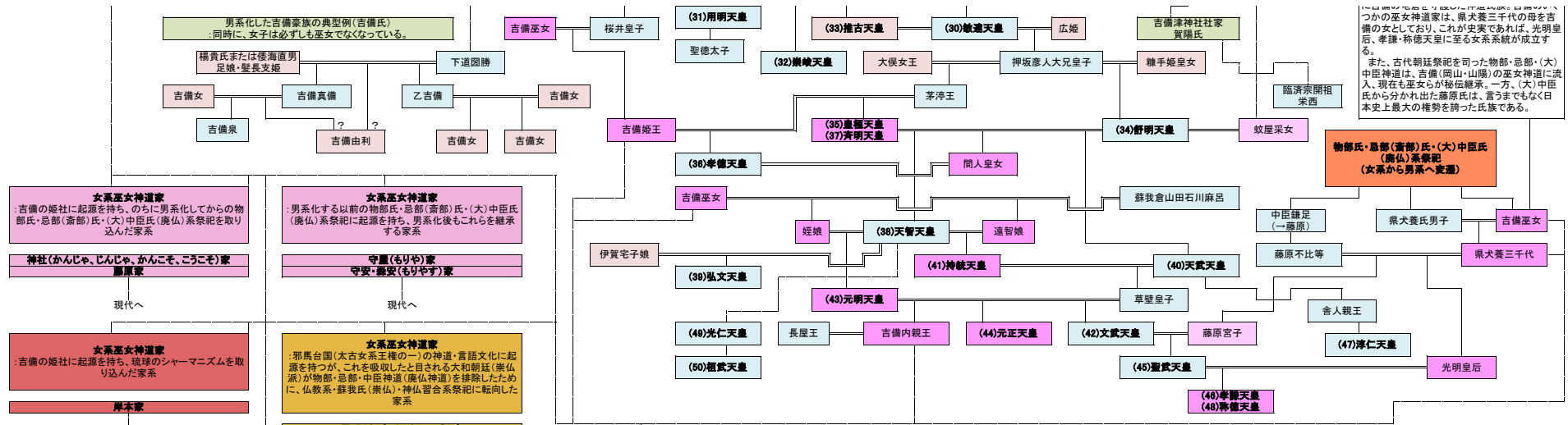
●当初の系統:原始巫女神道、非ヤマト王権系祭祀、出雲族系祭祀 ●近世までの系統:出雲神道

●当初の系統:原始巫女神道、非ヤマト王権系祭祀、出雲族系祭祀 ●近世までの系統:出雲神道

●当初の系統:原始巫女神道、桶狭埴丘墓流巫女神道、姫社系巫女神道、非ヤマト王権系祭祀、吉備国系祭祀、和氣氏系祭祀、古墳文明系祭祀、芥子山墓流巫女神道、物部氏・齋部氏・大和臣氏(廣仙)系祭祀 ●近世までの系統:備前一宮神子座流巫女神系、伯家神道、伊勢神道、吉田神道、吉川神道、華加神道、備家神道

●当初の系統:『記紀』信仰、天照大神信仰、天孫信仰 ●近世までの系統:伊勢内宮(荒木田)神道、齋王(齋宮、齋院)系神道、蘇我氏(崇仏)系祭祀、国学、水戸学、復古神道 ●近代以降の系統(巫女は禁止):神祇官、教部省、大教院、神道国教化(国教神

●当初の系統:『記紀』信仰、天照大神信仰、天孫信仰 ●近世までの系統:伊勢内宮(荒木田)神道、齋王(齋宮、齋院)系神道、蘇我氏(崇仏)系祭祀、国学、水戸学、復古神道 ●近代以降の系統(巫女は禁止):神祇官、教部省、大教院、神道国教化(国教神



※ 本系図は、岡山県の吉備王国系・教派神道系巫女神道社家(『旧派歌道総覧』を見よ)の協力による。

★◆ 同前

【特徴】

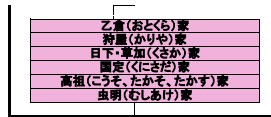
近代化に伴い、明治新政府は巫女神道(巫女のおよびその巫女が属する女系神道家・社家に弾圧を加え、女系神道家・社家の多くを廃絶に追い込んだ。廃絶策としては、神懸りを解く儀式を行ったのちに華族・士族の女中・家政婦(側室・妾)として割り当て、国外追放する(欧米諸国男性の家とする、欧米の魔術師すなわち魔女に転向させる)などがあつた。

政府は、キリスト教文明に倣つた近代国家建設を目指す一方で、明治天皇を頂点とする祭政一致国家を目指し、神道国教化を画策したが、すぐに「神社は宗教ではない(神社非宗教論)」という論理を用いて、天皇大権を有し統治権を総攬する明治天皇のもと、国家祭祀(皇室神道・国家神道、狭義の神社神道)と宗教(教派神道、仏教、キリスト教など)とを分離し、管轄局もそれぞれ神社局と宗教局に分割した。

国家祭祀に神懸り巫女存在は不要とされたため、この時点で生き残っていた古代以来の女系巫女神道は、教派神道などの神道系新宗教教団に強制配属させられた。但し、次第に巫女たち自らこれらの教団に所属し、祭祀を秘伝秘儀化させたため、祭祀はこれらの教団に密かに流れ込んだ。これらの教団は岡山・山陽地方発祥のものが多く(神智教、萬住教、金光教、ほんふしんなど)、吉備王国系の巫女神道家は、主にこれらの教団に巫女を所属させ、または派遣することで、現在まで維持されている。

但し、新宗教教団によく見られるスピリチュアリズムやニューエイジ思想、靈感療法に巫女神道が利用されており、教団側の營利主義に押されて伝統的な神道祭祀を失っている家もある。また、祭祀の秘伝秘儀化の実状の秘匿および家系の事情(父親が不明である巫女、母や自身が妾である巫女が多いこと)などから、系図に男子を記載しない例が増えている。

なお、近代化にあたり社家の世襲も廃止されたため、有力な男系世襲社家(白川伯王家、吉田家)も衰退に追い込まれている。



現代へ

